道央地区知的障がい児・者家族会 会報９号（平成 28 年 10 月発行 責任者：畑 誠一）

道央家族会会報

☆平成２８年度道央地区知的障がい児・者家族会研修会に出席して

このまちでいきる～法人の取り組み～

平成２８年１０月７日、北広島市芸術文化ホールにて、道央地区知的障がい児・者家族会研修会が開催されました。講師に、社会福祉法人北ひろしま福祉会 常務理事・総合施設長 奥田誠氏をお迎えしました。

今回の演題「利用者の高齢化対策について」を、法令等による理論的な説明ではなく、北ひろしま福祉会の具体的取り組みの中で説明されました。

北ひろしま福祉会は、まもなく設立７０周年を迎える施設ですが、紆余曲折がありながら平成元年から始めた改革を経て、現在の法人理念「利用者満足・家族満足の限りなく追求」を確立し、共生できる地域社会をつくることを目指しています。

具体的には、障がい者支援事業、介護保険事業、そして障がい者相談事業・障がい者就労支援事業などの総合支援事業、この３事業を包括する地域包括ケア事業を推進し、更に市民参加事業、共生型事業を推し進めることで、総合的な事業を実施しています。

特に近年、利用者が高齢化してきている中で、検温・血圧等の毎日の測定、歯科口腔衛生管理など、自分で好きなものを食べることができながらの誤嚥性肺炎の予防にも心がけています。もしも健康を害し回復が難しい状況になってしまい、本人が病院ではなく施設での生活を望まれた場合は、病院と連携し理学療法士による機能訓練、言語聴覚士による訪問指導も実施するなど、他職種と連携し、介護ベッドや体位交換用具、車椅子等の移動用具、安全に移乗出来る用具やリフト等の福祉用具の導入などで、利用者の希望と満足を最優先に考えているとのことです。

病院ではなく生活の場、治療が目的ではなく希望・要望をかなえ、自分らしく施設で生きることを大切にしているとのことです。

この後、健康を害しながら最後まで施設で生活した貴重な２つの事例の紹介がありました。現行の制度では障がい者の看取りは認められていませんので、最後はホスピスに移られたのですが、葬儀は生活の場だった施設で営まれたそうです。「どこで生き抜くのか」最後まで本人の希望を尊重し、支えた支援員、及び関係者の方に心から敬意を表したいと思います。

利用者の高齢化に伴い、生活の場については在宅からグループホームや施設入所に代わり、今まで自分で出来ていたことが介助を要するようになります。日中活動も、例えば屋外作業から室内の軽作業へと無理のない活動に変わっていきます。健康を害して入院したり、日常生活で介護を要したりするようになったときにはどうなるのか。私たち家族の思いの尽きることはありません。

道央地区の全ての施設で、北ひろしま福祉会と同じ取組をして頂いていると思いますが、私たちの家族である利用者のための取り組みをよろしくお願いします。

今回資料提供頂いた「北ひろしま福祉会の基本姿勢」を掲載し、道央地区知的障がい児・者家族会研修会の報告とさせて頂きます。

（文責：土門　誠）

☆北ひろしま福祉会の基本姿勢

福祉の基本は何でしょうか？　時代とともに変わるその制度は時の財政状況により大きく左右されることが多いと思います。福祉政策に対する負担のあり方が、いつの時代でも議論の矢面に立ち、高福祉高負担ならまだわかるのですが、低福祉高負担が財政面から見る福祉の中心にあるように感じます。

経済学者のトマ・ピケティ氏は経済的不平等と所得格差の拡大が世界的に貧富の格差を増大していると話しています。富の再分配についても大きく論じられています。

世界では国が破綻する状況も報道される昨今、医療、福祉、人間社会のあり方について、現代社会に生きる私たちは、どう生き抜けば良いのか、それぞれに問われていると思います。そのような中でこの度、当法人の障がい者支援事業所における高齢化対策についての取り組みについての報告を依頼されました。

障がい者施設においても例外なく平均年齢の上昇とともに、成人病により人生の終末期を迎える方が以前より多くなりつつあります。法人として運営理念にある「利用者満足、家族満足」を、人生の満足としてどこまでサポートできたのか、職員の自己満足にならないように検証を行っていますが、まだまだ不十分な面が多いものと推察します。

私たちは住みたい町で生活し、自分の思う活動や仕事に就き、人生の終末期を迎えられればと思いますが、最近はそのようなことも、思いと現実との狭間で夢物語に思うことも多々あります。世界的にみる超高齢化社会と少子化の状況は、日本社会でも無関心ではいられないと思います。

北ひろしま福祉会として、これからの超高齢化社会に支援、介護を必要とする市民の皆さんにどのように提供して行くのか。この町でともに生きることの思いを法人共通認識として、内容の充実と新たな取り組みを創造し、組織的備えを進めて行かなければと思います。

●多様化する生活への支援

・地域包括ケア拠点整備と介護体制の強化

・在宅生活への支援強化（相談支援、訪問介護、医療への対応）

・人材確保と他職種間の組織的連携強化

・地域との連携強化（日常連携、災害時連携）

●法人事業の強化策

・身体機能維持の基礎訓練向上

・基礎介護、基礎医療の充実

・高齢化社会へ向けた住環境の充実

・終末期ケアの充実

（社会福祉法人北ひろしま福祉会　総合施設長　　奥田　誠）

☆恵庭光風家族会

～虐待防止に関する研修会開催～

８月２６日（金）、家族会と施設共催で地域交流ホ―ムで「障がい者の虐待防止と良い支援をするために」をテーマのもと、講師に毎日新聞論説委員の野澤和弘氏を招き研修会が開催されました。

家族会からは 20 名と、職員の方が多数参加されました。

野澤氏には自閉症で言葉も話せない 29 歳の息子さんがいらっしゃるということで、身近な人に感じられ、講演内容も、とてもわかりやすいものでした。

『職員に必要なものは何なのか!』

- 一人の生きにくい人を幸せに出来る仕事をしているんだというプライドとやりがいを感じ、もし虐待の場面を見てしまったとき「見て見ぬふり」をすることに恐れを感じること。
- 障がい者は出来ないことがいっぱいあるけれど、出来ることもあるはず、そこを認めて伸ばしてあげること。
- 障がい者の行為や言葉に興味を持つこと。本人の好みもだんだん変化するので、それについて行くことが大切。関わる相手によって自分の見せるものが違うので、たくさんの関係者から話を聞いて、真の姿を考えること。
- そして何よりも、支援者が幸せであること。幸せでなければ良い支援は出来ないので、心のコンディションを良くしておくことが大切。

職員の方ばかりでなく、私達保護者にとっても重要なことだと思います。

とても有意義な中身の濃い講演でした。

☆北広島市民の郷まつり

平成２８年８月２０日、第５回北広島市民の郷まつりが開催されました。今までにない悪天候の中でスタートしましたが、多くの来場者に訪れていただき、感謝と安堵の気持ちでいっぱいです。あのとき、こうすれば良かったとか、やらなければ良かったとか、後悔することなど、ひとつもありません。

会場準備では、勤務時間を調整したり、現場を抜けて準備の時間に充てたりしてくれた同僚たちにも感謝です。また、炎天下での準備中に宿直明けの職員が手伝いに来てくれ、ジュースやアイスの差し入れまでしてくれて順調に進めることができました。

当日まで、天気予報をチェックしながら、不安になったり、安心したり、落ち着きがないことがありました。その思いを隠しながら実行委員たちを鼓舞し、万全の状態で当日を迎えたのですが…生憎の雨。時折、顔を覗かせていた太陽もオープニング時には激しい雨雲に覆われ、とうとう雨が降り出しました。雨天案も検討していたのですが、折角、まつりの雰囲気を感じに来られた方に屋内はどうなのかと葛藤しながら、関係者を集めて、このまま屋外でやらせてほしい旨を訴え続け、１時間は短縮したものの、予定していたプログラムを屋外で終えることができました。

４月にスタートした実行委員会ですが、実行委員たちの行動力、フットワークの良さに日々助けられました。当日も雨の中、髪をベチャベチャにしながら走り回り、音響に限っては無理を言って機材を故障させながらも続けてもらいました。食べ物が濡れてしまう状態でも、最後まで会場に居てくださったお客様たち。雨の中でも、まつりを続けさせてくれた担当部長。オープニングを飾ってくれた勇太鼓。まつりを盛り上げてくださった出演者の方々。短い時間での練習でも完成度の高かった法人ダンサーズ。

色々な方々に支えてもらいながらの雨の中での市民の郷まつり。私にとって生涯忘れられない思い出となりました。このような機会を与えてもらった私は幸せ者です。

皆さん、ありがとうございました！！

（北ひろしま福祉会　北広島セルプ　　第５回 市民の郷まつり実行委員長　新谷　朋之）

☆熊本地震災害救援募金について

お陰様で、道央地区小計 346,446 円の募金がありました。

９月１日までの道家連の義援金合計 663,313 円を全施連へ送金しております。

ありがとうございました。

《編集後記》

今回、ご投稿いただいた方々に心より感謝申し上げます。

次号につきましても、ご投稿大歓迎です。

どうぞ、よろしくお願いいたします。